

# 日本英学史学会中国・四国支部

## ニューズレター

No. 100

*Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter*

<エッセイ>

### ニューズレター第100号発行を祝す

竹中龍範

まず、わが『日本英学史学会中国・四国支部 ニューズレター』第100号発行の慶びを支部会員の皆さまと分かち合い、これまでその編集に携わられた方々に御礼を申し上げたく思います。

前号において、本ニューズレターが次号を以て記念すべき第100号を迎える旨をお伝えしましたが、去る2月28日(日)にオンラインにて開催されました役員会にこれを記念号とすることを提案して、了承を得ました。具体的には、支部会員の皆さまに呼びかけ、本ニューズレターに関わって思い出されること、そのこれからの期待するものなどを自由に寄せていただくこととなりました。記事投稿者としての思い出、編集者としての苦労話、読者としての読後感など、さまざまな内容に及ぶことを期待するところです。かく言う筆者には、事務局長提案により、前号に続いてとはなるものの、記念号であることを慮って、支部長として巻頭エッセイを書くようにとの仰せがあり、連続登壇となったような次第です。

前号に触れましたように、本ニューズレターの創刊は、平成2(1990)年2月2日となっております。このことは、『英学史論叢』の前身『英学史會報』第8~13合併号の巻末に収められた広島支部活動報告(1990年4月30日付け)に「○「会員名簿」(平成元年度)が発行せられ、つづいて、支部「ニュース・レター」No.1が平成2年2月2日付に出た。報告連絡事項、会員消息、学会動勢など掲載の予定。」と過去形とも未来形ともとれる表現で記載されているところです。筆者の記憶している限りでは、このニュースレターを発行することは、事務局長を担当されていた寺田芳徳先生が始められたことで、あるいは一部の役員の方々のご相談になられてのことかも知れません。この後に発行されたニュースレターについては、そのうちNo.6~No.23が、No.19の号数が重複しているものの、『英学史會報』第15~20号に再録されていて、その内容を見ることができます。ただ、この時期、寺田先生は「ニュースレター」のほか、「広英史報」や「部報」という表題によって異なった内容の連絡情報も出しておられ、今日の『ニューズレター』とはかなり違った印象を与えます。そののち、「會報」が『英学史論叢』と改題されて以降は、このニュースレターを再録することは取りやめましたが、幸い、間があくものの、支部ホームページのほうにNo.29から最新号までのバックナンバーがアップされていて、その内容を読むことができるようになっております。誌面から受ける印象も変化を見せており、ぜひ通覧されることをお勧めいたします。

このようにして継続発行されてきた『ニュースレター』『ニューズレター』ですが、「會報」に再録された号や、ホームページ上にアップされた号を通覧すると、そこにはその編集にあたっていただいた方々の性格が反映されていて、これから先に担当していただく方がいかなるカラーを打ち出されるかを心待ちにするところです。あわせて、会員の皆さまからも積極的にご投稿をいただいて、内容豊かな支部活動の記録の場としていっそうの発展につながればと期待しております。

(日本英学史学会中国・四国支部長)

## 総目録付き米国版 Cassell's National Library 第1期の謎

田村道美

筆者は明治期から大正期にかけて、日本の文学者や学生が読んだ英語の廉価版叢書の内、Cassell's National Library (以下 CNL) と The Lotus Library について主に漱石との関連を調査し、支部例会や『英学史論叢』に発表してきた。また、上記二つの叢書についての研究はこれまで等閑に付されてきたため、筆者は特に CNL について集中的に調査し、英国で4期、米国で2期にわたって刊行されたことを突き止め、各期の刊行作品等を明らかにしたが、最後まで謎だったのが、米国版第1期の巻末に付された刊行書総目録であった。

CNL 英国版第1期は1886年から刊行されたが、作品の刊行順は少しずつ決定されていったようで、刊行書目総目録が巻末に付されるのは第2期(1891~1895年)からである。例えば、1886年に第1期第20番目の作品として刊行された George Crabbe の *Poems* にはこの作品までの刊行作品書目と次回配本作品名1点が掲げられているが、それ以降どういふ作品が刊行予定かは不明である。一方、1886年5月8日刊行の米国版第1期 *The Table Talk of Martin Luther* の巻末には作品番号を付した総目録が添えられている。[米国版では表紙右上部に発行年月日が印刷されている。] しかも“ORDER BY NUMBERS.”とある。「番号でご注文を」の「番号」とは作品番号のことである。ということは、この作品が刊行された1886年5月8日の時点で、総目録にあるどの作品でも注文すれば入手できたことを意味する。これはタイムマシーンで1886年と英国版第1期が完結した1891年の間を自由に行き来出来なければ不可能なことである。

米国版第1期の総目録付きとそうでないものを丁寧に調べてみると、二つの相違点に気がついた。出版社の住所が違う点と総目録の部分の紙質が本文のそれと違っている点である。Cassell 社のニューヨーク支社の歴史を見ると、1893年6月に W. L. Mershon が会社再建に乗り出し、新社屋を 31 East Seventeenth St. に移転したという。総目録付きの表紙下部にはこの住所が印刷されている。このことから、問題の CNL は Mershon が支社を引き継いだ1893年から刊行されたものと推測される。1893年であれば1891年に完結した CNL 第1期の総目録を付すことが可能である。この推測が正しければ、もう一つの謎も解ける。経営を引き継いだ Mershon は第1期の在庫品の処分を考え、表紙を張り替え、刊行総目録を付して刊行したのではないか。その際、表紙を全面的に変更することはせず、出版社の住所だけを変えることで無駄な費用と労力を省こうとしたのであろう。結果、1893年以降に刊行された作品にもかかわらず第1期の刊行年(1886~91年)が表紙にそのまま残ったと考えられる。以上のことから、総目録付きの米国版 CNL は実際には1893年から Mershon が同社の経営を放棄した1897年の間に刊行されたと推定される。

(香川大学名誉教授)

## 全ては出会いから

田中 正道

私は英語教育界に身を置く一人であるから英米の諸々の研究をすることが通常業務である。その研究はタテ（歴史）とヨコ（現況）を基軸としてなされなくてはならない。

タテの研究を深める場はいろいろあるが、私は本支部に育てていただいた。1977（昭和52）年の秋に支部が設立されたが、それと同時に会員になり現在に至っている。その間、初期の段階で私に決定的なインパクトを与えた出会いが二つあった。

一つは、支部設立の公開記念講演が広島女子大（当時）で開催された。講師はロンドン英印図書館のアンソニー・ファリントン副館長で演題は「英国における日本研究」であった。私はそれまでは日本から英国を眺めていただけだった。英国から日本を見る視座をあまり意識していなかった（不勉強のせいだが・・・）私には衝撃的な体験であった。以来、私の本支部での研究発表は英国に係るものばかりとなった。文部省（当時）短期・長期の在外研究はいずれも英国、滞英中の大英図書館通いは懐かしい思い出である。この図書館でも日本コレクション部長、ユーイン・ブラウン女史との出会いがあった。彼女は英日関係史だけでなく、実に幅広い分野・領域の碩学である。彼女から直接いただいた研究論文を今も「お宝」として大切に保管している。

いま一つの出会いは、やはり本支部の第25回研究例会（1991年12月14日開催）での記念講演である。講師の伊東隆夫先生（広島大学名誉教授）に「コロンブスと『東方見聞録』—コロンブスの米州発見 500年に因んで—」という演題で資料をもとに講話を賜った。その資料にはヴェニス商人・旅行家マルコ・ポーロの『東方見聞録』のラテン語訳初版本（1484年頃刊）の3ページ分がコピーしてある。

ピピノ（ドミニコ会士）が翻訳したこの書を読んで触発されたコロンブスが大西洋横断の大航海に挑んだと言われている。日本を黄金の国・ジパングと記されたページの余白には「多量の金」、「赤い真珠」などの書き込みがある。伊東先生が「赤い真珠というのはサンゴのことですよ。」と教えて下さった声が今も耳に残っている。30年前に頂戴したこの資料を大切に保管していることはもちろんである。

伊東先生の講演を拝聴してからアメリカへの関心が深まり、アメリカの文学、歴史などのにわか勉強（？）が始まり、今も細々とではあるが続いている。私が『フランクリン自伝』やジャック・ロンドンの『荒野の叫び声』などアメリカの「根源」を語る読み物を読むようになった淵源は先生の講演ではなかったかと思っている。

タテの研究を深めるとヨコがよく見えてくるのも不思議である。

（広島大学名誉教授）

## 英学史学会とともに歩む人生

鉄森 令子

ニューズレター第100号発行、おめでとうございます。

私が初めて日本英学史学会広島支部の例会に参加させていただいたのは、昭和59年11月7日に開催された第17回例会であったかと記憶しています。日本大学通信教育部の卒業論文作成にあたり、松村幹男先生にご指導をいただきながら「明治時代の英語教育」をテーマに取り組んでいました。

ある日、「歴史にご関心をお持ちで、もしよければ例会にお出でになりませんか。」と松村先生からお誘いいただき随分迷いました。しかし、東千田町の広島大学教育学部へ出かけ緊張しながらも「英学史の世界」に胸がワクワクしたのを今でも覚えています。

例会の後は鷹野橋にある「房州」での「茶話会」へ連れて行っていただきました。アルコールなしの懇親会はこれが最初で最後かなと思います。

その後、家庭の事情でしばらく英学史学会は遠い世界となりましたが松村先生はお手紙をよく送ってくださりいつも励まされていました。

平成6、7年ごろからは可能な限り春、冬の例会にも参加させていただきました。

思い出深い例会をご紹介します。

### 平成11年12月11日、第41回庄原例会（広島県庄原グランドホテル）

松村先生、寺田先生、妹尾先生、国利先生方によるシンポジウム、竹中先生、風呂先生の研究発表を庄原で拝聴するのはとても刺激的でした。そして翌日、「庄原英学校」を見学した後で「英学校址」の碑の前で記念撮影しました。20年たった今になってその価値の大きさを感じています。

### 平成15年12月6日 第49回松江例会（松江市サンラポーむらくも）

風呂先生のお車で田村一郎先生と一緒させていただきました。例会の翌日、ハーン関連の史跡めぐりをした後、遊覧船にて堀川めぐりをしましたが、雪が舞い始め炬燵に入っても寒くてたまりませんでした。そして、解散後、松江を出発する頃に猛吹雪になってしまいました。「雪女」が出てきて別れを惜しんで、とか、怪談話をしながら広島へ向かったのもまるで昨日のこのようです。

### 平成16年12月4日 第51回高知例会（高知大学教育学部）

村端五郎先生のご講演を拝聴しながら植物学者の牧野がなぜ英学に関係があるのか、不思議でしたが、翌日、「牧野文庫」を見学させていただき、すべての学問は英学とつながっているんだ、と感動しました。

馬本先生のご発表の「世良寿男」も初めて聞く人物でしたが、彼の自筆ノートはハーンの教え子栗原基の「英文学史」の講義であったことに驚きました。そして、教育実習の教案から「復文練習」をさせたのではないかと、という馬本先生のお話にまた一つ、自分の世界が広がるのを感じました。

松村先生に英学史の世界へ導いていただいて30数年、素晴らしい先生方に出会え、たくさんの方を教えていただき感謝いっぱいです。英学史学会中国・四国支部の一員であることが私の誇りです。これからもよろしくお願ひします。

(広陵高等学校)

## 懐かしき例会の思い出

藤本文昭

ニューズレターで73号に掲載された例会は、私にとって思い出深きものです。2012年12月8日、愛媛県今治市にある今治明德高等学校矢田分校を会場とし、本学会で私が初めて研究発表をした例会であったからです。

菅紀子先生が「今治出身の重見周吉と『日本少年』」、私が「太平洋戦争下の愛媛県今治地域での英語教育」という、本学会の特徴ともいえる会場地域の英語教育史、英語教育関係者をテーマにした研究発表でした。菅先生とは、ご著書『日本少年 重見周吉の世界』に関して高校生と一緒にインタビューさせていただいたこともあり、例会で共に発表させていただく機会を得たことはとても光栄でした。

あの研究例会から4ヶ月後、私は会場校となった今治明德を辞し、横浜市緑区の私立中高へ赴任しました。地方都市から首都圏への移動は、異文化体験そのものでした。慣れない都会での単身赴任生活もいつしか日常生活となり、今では立派な「浜っ子」を自称しております。

英学史・英語教育史に関する興味も薄れることなく第二の故郷となった横浜で英学史の研究を細々ながら続けています。貿易港横浜は外国との交流も盛んで、英学史に関するテーマに事欠くことはありません。それらのテーマの中で特に気になることが一つあります。岡倉天心・岡倉由三郎の義兄である岡倉真範（よしのり）という人物のことです。

岡倉真範（旧姓 清田八十八）は1856年、武蔵国都築郡台村（現在の横浜市緑区台村町）の出身。岡倉天心・由三郎兄弟の父、岡倉覚右衛門が経営する石川屋へ丁稚として奉公していましたが、その俊才ぶりを見込まれて主家の養子となります。1874年三月時点で天心と真範は東京外国語学校に共に在籍するも、真範は落第し、それが義父覚右衛門の逆鱗にふれ退学を余儀なくされます。東京府第一中学校教師を経て1882年から1900年まで学習院で教鞭をとり、教授になっています。

この学習院での勤務年数を見ると、菅先生が研究されている重見周吉（1893年学習院採用）と一時期、岡倉真範が学習院で共に勤務していたこととなります。

二人とも明治時代に英語教育に邁進する時期があるにも関わらず、なぜか後世にその人物伝がほとんど知られることがなく、一般的に知名度が低いようです。岡倉真範の場合、義兄弟があまりに有名な存在だったため、影が薄いのでしょうか。重見周吉の場合、学習院採用時、ライバルが夏目漱石でなかったらその存在すら確認されていなかったかも。この二人の碩学は、晩年を東京で過ごし、家名を継ぐ者もなく、墓所を探すのに後世の研究者が苦勞したという共通点があります。

私にとって今治例会で拝聴した重見周吉の人生と共通点のある岡倉真範という英語教育者が、現在自分が住む横浜市緑区の出身者であったことは、何かの縁と思われてなりません。このご縁を大切に、さらなる人物研究を進めていくつもりです。

### 参考文献

石井賢次郎（1982）。「隠れた明治の英語教育者 岡倉真範一天心・由三郎の影に生く」『都築文化2』緑区郷土教育史研究会、80 - 89。

(横浜翠陵中学高等学校)

## 「ニューズレター」と「広英史報」

馬本 勉

昭和から平成に変わった年は、私たちの支部（当時は広島支部）にとっても大きな変化の年でした。研究例会が3年ぶりに開催されたのが平成元（1989）年11月25日。翌年2月2日に「ニューズレター」No.1が発行されています。「ニューズレター」No.1は、「広英史報」2号の一部（と言っても大部分）としてスタートしました。当時の支部長・定宗一宏先生のお名前で作られた季節の挨拶で始まる「広英史報」2号ですが、挨拶文には「昨秋の総会および第21回研究例会を主とするニューズレターにより、平成2年度（1990年度）についての記事を含む若干のお知らせを事務局からいたします」とありました。その「ニューズレター」No.1は6つのセクションに分かれた記事と、別紙3枚で構成されています。（以下、便宜上「広英史報」を「史報」、「ニューズレター」を「レター」と略して表記します。号数表記は、報は○号、レターはNo.○とします。）

レターNo.1の§1では、第21回研究例会で行われた発表の感想を別紙（B4判1枚）にまとめていることを紹介。§2は会費納入のお願い。§3は『英學史會報』第8～13号合併号発行の予告と原稿募集。§4は「英学史研究に関係の深い分野（学界）に関するニュース」として、小泉八雲来日百年記念フェスティバルを紹介（別紙B4判2枚に日英語によるパンフレットの抜粋）。§5は会員動向の紹介（ここに私の入会が記してあります）。§6は次年度総会・例会の予告と発表募集でした。（手書きの6つの記事を「書院」というワープロで入力・出力したのは、教員1年目の私でした。）

「広英史報」という名は、広島英学史の会のお報せという意味合いだったのでしょうか。1号は平成元（1989）年10月31日、その年から広島支部の事務局長を務めていた比治山女子短期大学・寺田芳徳先生のもとで発行されました。11月25日に開催される第21回研究例会の案内（プログラムは竹中龍範先生と河口昭先生による研究発表）ですが、ここにはまだレターはありません。

史報はその後、続く紙面で史報の号数から1号遅れのナンバリングが振られるレターを伴い、毎年2回の研究例会を挟む形で年4回、事務局から発信されます（史報18号・レターNo.17まで）。揃って年4回発行されるペースに変化が見られたのは平成6（1994）年度。その年度に史報は19号から22号まで発行されますが、20号にのみレターNo.18が掲載されます。平成7（1995）年度は史報23-26号が発行されますが、そのうち24号と26号のみにレターNo.19（両号とも同じナンバリング）が付されています。史報に「会告」や「部報」と記された紙面が現れ、これらには会のフォーマルなお知らせや報告を掲載し、レターの方は会員動向、関連学会や出版情報などの「彙報」とする。こうした差別化が意図されたのかも知れません。特にレターは、感想を交えた「事務局長の声」を伝える役割があったように思われます。

その後、平成8（1996）年度は年4回のすべての史報（27-30号）にレター（Nos.20-23）が付される形に戻りますが、平成9（1997）年度前半は、再度同じ号数の振られた史報30号と翌31号に、いずれもレターNo.24が掲載されています。このNo.24までのレターは単体ではなく、いずれも史報の一部として書かれていました。

これ以降のレターは史報から独立していきます。平成9（1997）年度第2回例会後に発行されたレターNo.25は単独の通信物となっています。平成10（1998）年度は第1回の研究例会の前に史報33号、例会後に34号が発行されますが、いずれもレターを含みません。翌平成11（1999）年度と平成12（2000）年度は、例会開催通知を「部報」として掲載した史報と、例会後の報告を掲載した単独のレターとが交互に発行されます。手許に平成10（1998）年度後半の史報35号とレターNo.26がありませんが、これらも役割分化をした組み合わせではなかったかと推測しています。以降、平成14（2002）年度まで、例会報告を主たる役割として独立したレターは年2回のペースで発行されます（No.34まで）。

史報とレターは、平成15（2003）年度にすべてのお知らせを含む「ニューズレター」としての歩みを始めるまで、発行の形を変化させつつも、毎年欠かさず、事務局から会員へ情報提供を続けてきました。この継続こそが広島支部の強みであったと気づかされます。それを形として残された諸先生、諸先輩に、改めて敬意と感謝の気持ちを表したいと思います。

（県立広島大学）

## 日本英学史学会 中国・四国支部

### 令和3年度 総会・第1回(通算83回) 研究例会のご案内

令和3年度支部総会、及び第1回(通算第83回) 支部研究例会をオンラインで開催いたします。今回の研究例会では、研究発表が2件予定されています。ふるってご参加くださいますよう、よろしくお願いいたします。研究例会のあとには、オンライン懇親会を企画いたしました。こちらの方へも多数のご参加をお待ちしております。

日時： 2021年5月29日(土) 13:00 オンライン受付開始  
方法： オンライン会議システム Zoom による開催  
参加費： 会員、非会員とも無料

支部総会 (13:20~13:50)

議長選出、前年度活動報告・会計報告・会計監査報告、役員選出、新年度活動計画、他

開会行事 (14:00~14:05) 支部長挨拶

研究発表(1) (14:05~15:15)

#### 「英学者本田増次郎の生涯：信仰・博愛と広報外交」

長谷川 勝政 (日本英学史学会本部会員)

【概要】岡山県久米郡美咲町出身の英学者本田増次郎(1866-1925)の紹介です。これまで高等師範学校などでの英語教育者としての業績は知られていましたが、1905年の渡米以降の仕事については謎に包まれていました。実はこれが広報外交であったことをご報告の中心に据え、その生涯を概観します。

研究発表(2) (15:30~16:40)

#### 「下関商業学校の英語教育(1)ーその充実までの過程を辿ってー」

保坂 芳男 (拓殖大学)

【概要】明治17年創立の赤間関商業講習所(後の下関商業学校)の初代校長(所長)は福沢諭吉の従弟、中村英吉であった。慶応義塾の影響下で発展し、明治19年に視察した文部省視学官の報告には西日本の商業学校に於いて「赤間関と八幡商業学校が第一」とある。西日本を代表する商業学校と評価された下関商業学校の当時の教育、特に英語教育の実態を明らかにしたい。

閉会行事 (16:45~16:50) 副支部長挨拶

懇親会 (17:30~19:00) オンラインで開催(参加自由。飲み物や食事は各自準備)

#### オンライン研究例会の参加申し込みについて

5月24日(月)までに、電子メールにてお申込みください。(メールアドレス [eigaku@tom.edisc.jp](mailto:eigaku@tom.edisc.jp))  
後日、研究例会参加用のURL(アクセス用アドレス)をお送りします。

## 中国・四国支部ニュース

### >> 事務局よりお知らせとお願い

●支部総会・研究例会・懇親会の出欠について、  
5月29日(土)に開催される支部総会・研究例会・懇親会の出欠について、5月24日(月)までにお知らせください(本ページ末尾に記した事務局のメールアドレス、または携帯電話番号までお願いします。)

●名簿の改訂について  
「会員登録確認票」をお届けします。変更のある方は5月24日(月)までに、事務局までお知らせください。

●会費の納入について  
例会終了後に、『英学史論叢』、名簿とともに、年会費用の振替払込用紙をお送りしますので、令和3年度年会費(一般3,000円、学生2,000円)の納入をお願いします。恐れ入りますが、手数料をご負担ください。なお、年会費を2年間未納の場合は「自然退会」となりますので、ご注意ください。

## 英学史情報ひろば

◇日本英語教育史学会第37回全国大会  
令和3年5月15日(土)・16日(日)  
オンライン開催  
《記念講演》(5月15日)  
『『国際英語』教育の研究における歴史的考察の意義』日野信行(大阪大学大学院教授)  
《研究発表》(5月15・16日)  
「文部省主催中等英語教員講習の史的研究(その1)」孫工季也(京都大学大学院生)・江利川春雄(和歌山大学名誉教授) ほか  
《参加型シンポジウム》(5月16日)  
「アーカイブの重要性: コロナ禍のもとでの英語教育」話題提供・馬本 勉(県立広島大学)  
\*日本英語教育史学会ウェブサイト <http://hiset.jp>

◇竹中龍範(2021).『阿閉政太郎譯『會話体スウイントン氏初學入門及第壹讀本獨案内』(明治22年)をめぐって』『東日本英学史研究』20, 3-19.

◇河村和也『『語学教育』ものがたり(22)~(24)』(連載中)  
(22) 今も愛される辞書の誕生(3)『語研だより』381(2021年2月号) p.4  
(23) 音声学者, 女子教育を語る(1)『語研だより』382(2021年3月号) p.4  
(24) 音声学者, 女子教育を語る(2)『語研だより』383(2021年4月号) p.4

◇江利川春雄(監修)『英語教育1936~1947年刊』(全8巻+別巻, [解題] 江利川春雄・上野舞斗, ゆまに書房) 第1回5巻は2020年11月発行, 第2回3巻+別巻は2021年4月に発行されました。

◇辻 伸幸ほか(編)(2021).『英語教育の歴史に学び・現在を問い・未来を拓く—江利川春雄教授退職記念論集』溪水社。

◇村端 五郎(2021).「堀達之助編・堀越亀之助増補『改正増補英和对訳袖珍辞書』の異版刷同定をめぐる新たな手がかり」『宮崎大学教育学部紀要』96, 26-50.  
※元会員である村端先生より寄贈を受けました。閲覧を希望される方は事務局までお知らせください。

広島英学史の周辺(66) 18年間、「広島英学史の周辺」にいろいろなことを綴ってきました。編集後記を兼ね、英学史的な話題を提供する場になればと思って始めたものですが、66回を数え、今回が最終回となる予定です。▼ここに書くために資料を読み、推敲を重ねる時間が楽しい、楽しいと、何度も書きました。読み返すと妙に力の入った文章もあり、若いなあ、と恥ずかしく思います。▼ニューズレターを支えてくださった皆様に、改めて御礼を申し上げます。ありがとうございました。▼エッセイに関連して、「広英史報」35号、40号以降、「ニュースレター」No.26の情報をお持ちの方は、ぜひお知らせください。▼ではオンライン例会でお会いしましょう。(馬)

日本英学史学会中国・四国支部ニューズレター No.100  
2021年5月5日発行  
発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中 龍範)  
事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562  
県立広島大学 馬本研究室内  
電話: 090-1335-6933 (携帯)  
e-mail: eigaku@tom.edisc.jp  
ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>  
郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.100 May 5, 2021